

会話における指示

—はじめて言及する対象をどのように指示するか—

須賀 あゆみ

1. はじめに

私たちはコミュニケーションにおいて、自分の意図を相手に適切に伝達するために様々な表現手段を用いています。指示表現(referring expression)の使用もその1つです。指示表現といえば代名詞や指示代名詞を思い浮かべがちですが、ここでは、人や物、概念などの対象を話し手が聞き手に認識・理解させるために用いる表現であると広く定義しておきたいと思います。

Stivers *et al.* (2007: 7) に指摘されているように、言語学における指示研究は、人称指示と照応に議論が集中してきました。Halliday & Hasan (1976) は指示現象をテキストの結束性(cohesion)を保証する機能を果たすものとして記述しています。また、Grosz, Joshi & Weinstein (1995) は、なぜ(1)の第3発話の He は John を、him は David を指すのかといった問題を解決すべくセンタリング理論を提唱しています。このように指示追跡(reference tracking)に関連して指示表現形式の選択要因を考察する研究が盛んに行われてきました。

- (1) John went to the grocery store yesterday.
He happened to see David on the way.
He invited *him* to see a movie tomorrow.

本稿では、会話の中ではじめて言及する対象をどのように指示するかという問題に焦点を当てて、指示研究の動向を概観してみたいと思います。

2. 聞き手の認知状態の想定

Prince (1992) は、話し手が意図する指示対象の心的実体を聞き手が保持しているかどうかという観点(Hearer-old / Hearer-new)と、指示対象が先行談話で言及されているかどうかという観点(Discourse-old / Discourse-new)から、指示対象の情報構造上のステイタスを下の A-C のカテゴリ

ーに区分しています。(〈Discourse-old, Hearer-new〉という組み合わせも論理的には可能ですが、談話内に一度導入された対象は心的実体として聞き手に保持されるとみなすため、除外されています。)

- A. Discourse-old, Hearer-old
B. Discourse-new, Hearer-old
C. Discourse-new, Hearer-new

A の 〈Discourse-old, Hearer-old〉は、談話内にすでに導入された対象を再度指示する際に生じ、前述の(1)において代名詞で指示される対象はこのステイタスを有しています。

Discourse-new のステイタスを共有する B と C の区別を説明するために、Prince は、ペンシルバニア大学で研究する話者がカリフォルニア大学の Sandy Thompson に電話をかけることをだれかに伝えようとするとき、その相手によって人物を指示する表現形式が使い分けられると述べています。

例えば、同僚の言語学者に話すときには、(2)のように Sandy Thompson という固有名詞を用いることとなります。

- (2) I'm waiting for it to be noon so I can call
Sandy Thompson. (Prince (1992))

このとき、話者は聞き手が Sandy Thompson という名前で指示される人物の心的実体をすでに保持している(Sandy Thompson という名前をもつ人物を同定できる)と想定しているので、指示対象は B の 〈Discourse-new, Hearer-old〉のステイタスを有しています。

一方、同じ情報を話者が近隣の住人に伝えるときには、相手は Sandy Thompson という名前の人物の心的対象を保持していないと想定するので、(3)のように someone in California という不定名詞句

を用いた発話が適切といえます。(someone called Sandy Thompsonではなく someone in California と描写されていることも興味深い現象です.)

- (3) I'm waiting for it to be noon so I can call someone in California. (ibid.)

このとき、不定名詞句で指示される対象はCの(Discourse-new, Hearer-new)のステータスを有しています。以上のことから、聞き手の認知状態を話し手がどのように想定するかということが、指示表現の選択要因となっていることがわかります。

Gundel *et al.* (1993) は、聞き手が指示対象の存在をどのように記憶にとどめているかという観点から、6種の認知ステータスを設定し、下のような階層上に位置付けられる各々のステータスに適した指示表現形式が使用されると考えています。

▶The Givenness Hierarchy

in focus > activated > familiar >

uniquely identifiable > referential >

type identifiable (Gundel *et al.* (1993))

- a) **type identifiable** : 聞き手が指示対象を種として認識可能な状態では、不定名詞句 a N が使用されます。

- (4) I couldn't sleep last night. A dog (next door) kept me awake. (ibid.)

- b) **referential** : 話し手が意図した特定の対象を聞き手が種として認識でき、指示対象の存在を認識したり、新たな対象を構築するとき、不定名詞句としての this N の使用が可能となります。

- (5) I couldn't sleep last night. This dog (next door) kept me awake. (ibid.)

- c) **uniquely identifiable** : 聞き手が指示対象を唯一存在する特定の対象としてとらえることができると想定されるとき、定名詞句 the N の使用が可能となります。

- (6) The dog next door kept me awake. (ibid.)

- d) **familiar** : 話し手が意図した指示対象の表示を聞き手が記憶の中に保持しているために、指示対象を唯一的に同定できると想定されるとき、指示代名詞句 that N の使用が可能となります。

- (7) That dog kept me awake. (ibid.)

- e) **activated** : 発話時に指示対象の表示が聞き手の短期記憶に存在すると想定されるとき、指示代名詞句 this N, 指示代名詞 this, that の使用が可能となります。指示対象が記憶から引き出されて活性化されている、直近の言語内外のコンテキストに存在している状況にあたります。

- (8) My neighbor has a dog.

a. This dog kept me awake.

b. This/That kept me awake. (ibid.)

- f) **in focus** : 指示対象が聞き手の短期記憶に存在し、かつ関心の焦点であるとき、代名詞の使用が可能となります。

- (9) My neighbor has a dog.

It kept me awake.

(ibid.)

Prince (1992), Gundel *et al.* (1993) の議論は、話し手が聞き手の認知状態を適切に想定できるということを前提になされています。しかし、実際の会話では、必ずしも常に話し手が聞き手の認知状態を想定できるわけではありません。会話の中で聞き手の承認を得てはじめて聞き手がどのような認知状態にあるのかが判明することもあります。

3. 相互行為における指示交渉

会話分析では、刻一刻と変化する会話のその場その場の状況に応じて、話し手が聞き手の認知状態を想定しながら指示表現を選択する側面を考慮しています。Sacks & Schegloff (1979) および Schegloff (1996) による記述を以下にまとめます。まず、指示表現を、聞き手が指示対象を認識できると想定して使用される指示表現形式(recognitional

form)と、聞き手が指示対象を認識できると想定しないで使用される指示表現形式(non-recognitional form)に区分し、それぞれ個人を特定できる「名前(name)」と、対象人物を認識する手がかりになる「描写(description)」に下位分類できるとしています。先の例でいうと、Sandy Thompsonは〈recognitional name〉に相当し、someone in Californiaは〈non-recognitional description〉に相当します。他に、例えばthe woman who sits next to youは〈recognitional description〉に相当し、a woman called Aliceは〈non-recognitional name〉に相当します。

そして、会話の中で初めてある人物を指示するとき、指示表現は次の2つの指針に基づいて選択されると仮定しています。

- [1] 最小指示の選好：1度に1つの指示表現を用いよ。
- [2] 受け手デザインの選好：可能ならば、recognitionalを用いよ。

「最小指示の選好」とは、ある特定の人物を指示するとき、その人物の属性や、話し手や聞き手との関係を考慮して、he, Joe, a guy, my uncle, someone, Harry's cousin, the dentist, the man who came to dinner など多様な表現で指示する可能性があります。会話では、1度にどれか1つの表現で指示されるということです。「受け手デザインの選好」とは、recognitional formを用いて聞き手が指示対象を認識できると話し手が想定し、そのことを聞き手が知っているなら、その指示表現を用いよ、という指針です。したがって、これら2つの指針から、「可能であるならば、1度に1つだけ recognitional を用いよ」という指針にしたがって指示表現が選択されるということになります。

さらに、英語の会話において聞き手が認識できると想定される第三者を初めて指示するとき、「名前」と「描写」のいずれも利用可能な状況では「名前」が用いられることから、「名前」の使用が選好されると述べています。また、「最小指示の選好」と「受け手デザインの選好」という2つの指針が両立しないときには、「最小指示」をあきらめる(つまり「名前」による指示を断念して「描写」という別の rec-

ognitional を用いる)ことによって受け手の認識を求めるほうが優先されると述べています。そして、これらの証を実際の会話の中に見ることができると考えています。

会話に導入する指示対象を聞き手が「名前」で認識できると想定していてもその保証がないとき、(10)の2行目の Fords? のように名前の末尾に上昇調の抑揚を用いたり、短い休止を置くことによって、選択した指示表現形式が「試み」であることを示すことがあります。それは、聞き手が名前前で指示対象を認識できるという話し手の想定が不適切かもしれないということを伝達するとともに、聞き手にその想定 of 適切性について反応を求める機会を作っていることとなります。

(10) [Sacks & Schegloff (1979) 一部改変 下線・囲みは筆者による]

- 1 A: ... well I was the only one other than than
 2 the uhm tch Fords?,
 3 Uh Mrs. Holmes Ford?
 4 You know uh [the the cellist?
 5 B: [Oh yes. She's she's the
 6 cellist.
 7 A: Yes
 8 B: ye[s
 9 A: [Well she and her husband were there...

(10)では2行目の「名前」による指示試行に対して、聞き手からは何も反応が起らないため、話し手は Fords という「名前」では聞き手が指示対象を認識することはできないのだと判断します。次に3行目で Mrs. Holmes Ford? と、より聞き手が認識できそうな対象に絞って「名前」による指示を試みますが、それに対する聞き手の反応(5行目の Oh yes.) が遅れて生じたため、4行目で the cellist? という「描写」による指示試行が行われています。

このように、1度目の指示試行が成功しないとき、2度目、3度目の指示試行でも recognitional form が用いられていることから、「最小指示の選好」より「受け手デザイン(recognitional の使用)」が優先されるということが出来ます。仮に、最小指示の選好が優先されるのであれば、1度目の指示で聞き手が指示対象を認識できないと判断した時点で、た

だちに non-recognitional を用いるはずだからです。

4. 活動としての指示

(10)の事例にみられるもう1つの特徴は、指示対象の認識を確認する相互行為によって、会話本来の活動が中断され、その中断された活動が9行目で再開されていることです。したがって、9行目の代名詞 she は先行名詞句 Mrs. Holmes Ford を照応するというより、むしろ2-8行目の相互行為を通して確立された指示対象を指しているということが出来ます。また、中断された本来の活動が再開されたことを合図する役割を担っているということも出来ます。こうしてみると、会話における指示は、会話本来の活動を支える副次的な活動としてとらえることができます。

Smith *et al.* (2005) は、2人組の被験者に同じ映像を途中まで見せた後、続きを見た1人が他者に映像で起こった出来事を語るという会話場面を設定し、興味深いデータを収録しています。(11)の1行目で語り手Bは代名詞 he で指示されている人物が振り向いたところ、別の人物が現れたことを語ろうとしています。

(11) [Smith *et al.* (2005) GLBCC 29, 148-154, 一部改変 下線・囲みは筆者による]

- 1 B: and then he was turning around,
 2 and it's you know
 3 there's that lady remember that lady that
 4 he saw on the ship?
 5 A: uh huh
 6 B: that he kind of fell in love with or whatever?
 7 A: yeah.
 8 B: so and he saw her,

3行目で Gundel *et al.* の〈familiar〉のステータスをもつ that N の指示表現形式が使用されていますが、この指示名詞句だけで指示が成立しているわけではありません。リマインダー機能を果たす *you know* や *remember*, 文脈を想起させる描写、相手の反応を促す上昇調の抑揚などを駆使しながら、話し手は聞き手が認識可能な対象を指示しようとしていることを伝達し、聞き手からその承認を得ています。

このように指示を会話参与者による活動とみなす視座から、会話における指示現象の新たな側面をとらえることができると考えられます。

参考文献

- Grosz, Barbara, Aravind Joshi and Scott Weinstein. 1995. "Centering: A Framework for Modeling the Local Coherence of Discourse," *Computational Linguistics*, 21: 2, 203-225.
- Gundel, Jeanette. K., Nancy Hedberg and Ron Zacharski. 1993. "Cognitive Status and the Form of Referring Expressions in Discourse." *Language* 69, 274-307.
- Halliday, Michael A. K. & R. Hasan. 1976. *Cohesion in English*. London: Longman.
- Prince, Ellen. 1992. "The ZPG Letter: Subjects, Definiteness, and Information-status," In Mann, William C. and Sandra A. Thompson., (eds.) *Discourse Description: Diverse Linguistic Analyses of a Fund-raising Text*, 295-325. Philadelphia / Amsterdam: John Benjamins.
- Sacks, Harvey and Emanuel A. Schegloff. 1979. "Two Preferences in the Organization of Reference to Persons in Conversation and Their Interaction," In Psathas, George (ed.) *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology*, 15-21, New York: Irvington Publishers.
- Schegloff, Emanuel A. 1996. "Some Practices for Referring to Persons in Talk-in-Interaction," In Fox, Barbara (ed.) *Studies in Anaphora*, 437-485. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.
- Smith, Sara. W., Hiromi Pat Noda, Steven Andrews, and Andreas H. Jucker. 2005. "Setting the Stage: How Speakers Prepare Listeners for the Introduction of Referents in Dialogues and Monologues," *Journal of Pragmatics* 37, 1865-1895.
- Stivers, Tanya, Nick J. Enfield and Stephen C. Levinson. 2007. "Person Reference in Interaction," In Enfield, Nick J. and Tanya Stivers (eds.) *Person Reference in Interaction: Linguistic, Cultural and Social Perspectives*, 1-20. Cambridge: Cambridge University Press.